

# 志賀直哉年譜考 (十二)

——明治四十年七月から十二月まで——

生 井 知 子

明治四十年(一九〇七) (数え二十五歳・満二十四歳)

7・1(月) 午前、斎藤博が志賀家に来宅。午後、武者小路実篤が来宅。夜、直哉は柳宗悦の家に行く。(日記)

直哉は、「こゝろの華」第十一巻第七号に、『木下利玄「お京」をよむ』(原題『お京をよむ』)を「登毛」の署名で発表。正親町公和・武者小路実篤らも感想を寄せた。(新『志賀直哉全集』<sup>⑩</sup>)

7・2(火) 直哉は、松平春光、柳谷午郎、田村寛貞と三崎へ旅行。(日記)〔手帳7〕補⑤P200～201(M40・7・8有島生馬宛書簡)

7・3(水) 直哉ら一行、帰京。昨日船に乗り遅れた米津政賢と大船で合流。直哉は国木田独歩の『牛肉と馬鈴薯』を読む。晩、腹を立てる。(日記)〔手帳7〕補⑤P201(M40・7・8有島生馬宛書簡)

直哉は、田村寛貞・柳谷午郎と連名で、三崎から、木下利玄に絵葉書を送る。(M40・7・3木下利玄宛書簡)

7・4(木) 直哉は終日苦しむ。ゴリキリーの翻訳を二つ読む。夜、武者小路実篤・木下利玄と銀座を散歩。(日記)

7・5(金) 午前、直哉は泣く。いくら愛されても解されなければ苦しいと思う。午後、武者小路実篤を呼ぶ。白犬は死んでいたことが分かる。毒殺されたらしい。(日記)(M40・7・8有島生馬宛書簡)〔天津順吉 第二十四、七〕(草稿『第三篇』十)有島生馬が直哉に絵葉書を書く。直哉が岩元禎と前後してパリに留学に来た夢を見た、など。(『志賀直哉宛書簡』)

7・6（土）直哉は、結婚は冒険なり、祖母は非常に余を愛してくれるが少しも解してくれない、と手帳に記す。（「手帳7」補⑤P 198～199）

午前、直哉は、志賀留女に怒っていい気持ちになる。（日記）（M40・7・8有島生馬宛書簡）（「天津順吉」第二一五）（草稿『第三篇』七）

7・7（日）直哉は内村鑑三の所に行き、「マルコ伝」第二章の話を聞く。家の枇杷を持参する。午後、木下利玄が志賀家に来宅。

野上弥生子『仏の座』、高浜虚子『大内旅館』を読む。（日記）（「手帳7」補⑤P 197～198）

Cを愛していると手帳に記す。（「手帳7」補⑤P 199）（「天津順吉」第二一六）

この頃 『大小小紋』のワキにしようとしたミノリという赤坂の雛妓が自殺。（「手帳7」補⑤P 199）

7・8（月）直哉は、志賀留女・英子を連れて、明治座へ行く。大阪堀江人形浄瑠璃の「仮名手本忠臣蔵」（大序から両国橋まで）を見る。大隅太夫・春子太夫・伊達太夫ら。（日記）（『続々歌舞伎年代記』坤の巻）（「天津順吉」第二一五）（草稿『第三篇』十）

直哉は、有島生馬に手紙を送る。黒木三次について、真理を恐れるようになると人間も救われなと思う。昨年春読んだハウプトマンの『孤独生活』のJohnが《本当に其夫を愛してよくかしづいてゐる》妻Kittyを捨て、《これを解してくれた》Anna Mahrの元に走った事に共感し、《僕に若しJohnのAnna Mahrのやうな女があつたら》《僕を非常に愛してくれる、愛しては呉れるが少しも解してはくれぬ》《祖母と家を捨て、何所へか行くかも知れぬ》と思ひ、その後の悲惨な結末を想像する。有島武郎と相談した事だが、有島生馬が自分で働いて関安子に何がしかの金を贈つてはどうか、安子はいよいよ学校に入った、武郎が両親に安子の事を打ち明けようとしている。三崎旅行のことなどを記す。（M40・7・8有島生馬宛書簡）

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。この頃になって、自分の仕事のあまりに大きいのに気がついた、早く健全なる自

由なる独立なる生涯に入りたい、など。(『武者小路実篤全集』(『志賀直哉宛書簡』)

7・9(火) 直哉は、松戸の勘解由小路資承の中学を訪問。裏松友光の家に行く。《Cを思ふ》と日記に記す。(日記)

この時か? 直哉は、松戸の川岸で勘解由小路康子を初めて見、強く印象に残る。(『くもり日』)

7・10(水) 午前から岩倉道俱が志賀家に来宅。(日記)

7・11(木) 午後、木下利玄が志賀家に来宅。(日記)

直哉はCへの恋を自覚し、結婚の決心がつく前に、箱根にCを連れて行くのは危険だから、咲にしよかと考える。

(『手帳7』補⑤P201~202)

7・12(金) 午後、武者小路実篤が志賀家に来宅。直哉と三島弥吉のことを相談する。(日記)

直哉は、木下利玄『万霊塔』の細部についての評を書く。(未定稿33『万霊塔』)

7・13(土) 直哉は午前、暮参。(日記)

〔手帳8〕(Impressions XIII) を使い始める。(新『志賀直哉全集』補⑤P205)

内村鑑三の想い出について手帳に書く。(『手帳8』補⑤P205)

7・14(日) 午後、直哉は常磐木倶楽部の落語研究会に行く。円喬の「船徳」がいい。帰途、丸善で“Iscau”という本を買う。

夜、志賀直方と激論。(日記)

7・15(月) 午後、直哉は武者小路実篤と三島弥吉の家に行き、母・三島和歌子と弥吉のことを相談する。木下利玄を訪問するが

不在。夜、直哉はCと友達になる。清について嫌なことを聞く。(日記)

Cに対する思いを手帳に記し、自分の結婚の条件について考える。(『手帳8』補⑤P205~208)

7・16(火) 午前、直哉は咲を呼んで、清のことを聞く。田村寛貞が志賀家に来宅。午後、清を呼んで暇を取れと勧める。夜、米

津政賢が来て、小説の話をする。(日記)(『手帳8』補⑤P208)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。三島弥吉のために出来るだけのことをする、など。（『武者小路実篤全集』）（志賀直哉宛書簡（一））

木下利玄が直哉に葉書を書く。昨日は寺参の留守で失礼した、明日午後四時頃志賀家に行くつもりとのこと。（『志賀直哉宛書簡集』）

7・17（水）

午前、武者小路実篤と勘解由小路資承が志賀家に来宅。夜、木下利玄が来宅。直哉はCと清のことを相談し、こちらから暇をやることにする。（日記）

午前、Cにはサラサラとした所があると手帳に記す。C・Oは、明治二十三年十二月二十五日、小見川の生まれ。（『手帳8』補⑤P208）

7・18（木）

午後、柳宗悦が志賀家に来宅。清が帰る。（日記）

7・20（土）

直哉は『独歩集』読了、『湯ヶ原より』『春の鳥』が良かった。小林一郎『プラトーン』を百ページだけ読む。非常に面白い。夜、米津政賢から自作の小説が二篇来る。『雪子』という方はまるで駄目だが、『リボン』という方は中々よいと思う。（日記）（『手帳8』補⑤P215～220）

7・21（日）

午前、直哉は内村鑑三の所に行き、「マルコ伝」第二章十八節からの話を聞く。直哉は、『西緑河岸』を落想（↓後の未定稿32『小説 緑河岸』）。（日記）（『手帳8』補⑤P209～213）

\*座談会『志賀直哉日記をめぐって』によれば、『西緑河岸』は、下町趣味の小説で、鏡花趣味・『たけくらべ』が混じり合った調子のもの、西緑河岸は日本橋にある、という。

7・22（月）

午後、志賀家では新粉を作るので大騒ぎする。夕方と夜、直哉はCと話す。（日記）↓未定稿32『小説 緑河岸』のモデル

直哉は、Cを愛するようになってから雇女に同情するようになった、理屈からは偽善しか出来ないが、愛があれば善

行が出来ると手帳に記す。(「手帳8」補⑤P20～21)

『緑河岸』のストーリーを手帳に記す(↓未定稿32『小説 緑河岸』。(「手帳8」補⑤P21～23)

7・25(木)

武者小路実篤が直哉に手紙を書く。雑誌発行より単行本を出したが、直哉に対して、単行本より雑誌を出す方がいいと考える理由を述べたもの。今、真面目な人が読む雑誌は、小説が載る「新小説」と論文が載る「聖書之研究」だが、両方を兼ね、両者にはない口絵がつき、今の青年にふさわしい主義を持っている雑誌を出したい、単行本より雑誌の方が多くの人の目に触れやすく、感化の力も強いと思う。大学をやめる手紙を、四五日のうちに書くつもりだ、その時、雑誌を作りたいということを書こうと思う、など。(『武者小路実篤全集』(「志賀直哉宛書簡」)

正親町公和と細川護立が、伊香保から直哉に絵葉書を書く。(「志賀直哉宛書簡」)

7・26(金)

木下利玄が直哉に絵葉書を書く。米津政賢の小説『雀太夫とリボン』が中々いい、米津の小説を『万霊塔』と並べて「心の花」に出したいなど。(「志賀直哉宛書簡」)

7・27(土)

夜、直哉はCと一時間ばかり話す。Cは可愛がられて育ったのびのびとした性質で、自分のネツツリした性分からのサラリとした性質を好むのだと感じる。(「手帳8」補⑤P23～24)

7・28(日)

直哉は、明治座で大隅太夫の「壺坂靈驗記」を聴く。(「手帳8」補⑤P24) (『続々歌舞伎年代記』 坤の巻)

7・31(水)

木下利玄が直哉に葉書を書く。八月一日の消印。今夜、築地の病院に入院した、など。(「志賀直哉宛書簡集」)

8・1(木)

午後、直哉は、ハウプトマンの“Hannele”(「ハンネレ」)を読み、感服する。夜、木下利玄を訪問。武者小路実篤も来ていた。一日、苦しむ。(日記)

8・2(金)

直哉は、尾崎紅葉『心の闇』と、国木田独步『泣き笑ひ』と、チェーホフの訳『小猫』を読む。夕方まで苦しむ。武者小路実篤と裏松友光が志賀家に来宅。十時から十二時までCと話し、心が晴れる。(日記) (「手帳8」補⑤P22～25)

8・3(土)

直哉は、木下利玄を病院に訪問。午後は旅行の支度。夜、Cと話し、写真を貰う。(日記)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。グリヨンの消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

8・4(日) 志賀直哉・留女・英子・直三・淑子・咲の一行で、箱根に避暑に赴く。紀伊国屋別荘の奥座敷。(日記)〔手帳8〕補⑤

P 226)

8・5(月) 直哉は手帳に、互いによく知り合ってから後でなければ結婚せぬと決心した青年が、自家の女中と結婚するという傾向が追々出てくるだろうと記す。(『手帳8』補⑤ P 226～227)

武者小路実篤が直哉に、昨日金田に着いたと手紙を書く。(『武者小路実篤全集』)

8・6(火) 直哉は、田山花袋の『梅屋の梅』を読む。Cの顔が亡き母にどこか似ているように思われて来る。(日記)〔手帳8〕

補⑤ P 227～228)

木下利玄が病院から直哉に葉書を書く。正親町公和『寂しき我家』・米津政賢『滝』を読んで失望したとのこと。

(『志賀直哉宛書簡集』)

8・7(水) 直哉は、田山花袋の『自殺』を読む。(日記)

塩原の川村弘が直哉に手紙を出す。箱根着の手紙を受け取ったとの記述あり。(『芳舟遺稿』所収川村弘書簡)

鎌倉の柳宗悦が直哉に絵葉書を書く。(『柳宗悦全集』)

8・8(木) 直哉は弁天山に行く。(『手帳8』補⑤ P 229) ↓『箱根山』〔弁天山〕

8・9(金) 直哉は、『小説 緑河岸』(未定稿32) 措筆。描写の仕方・文体を改めた『秋』または『冬』を着想。(日記)〔手帳8〕補⑤ P 230～232)

志賀直温、札幌木材株式会社取締役役に就任。(志賀家系図)

武者小路実篤が村松務・裏松友光と連名で、直哉に葉書を書く。(『武者小路実篤全集』)

木下利玄が直哉に病院から葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡』)

8・10(土) 直哉は、榎本尚方に会う。(日記)

昨晚落想の『秋』または『冬』の梗概を手帳に記す。(「手帳8」補⑤P230～232)

Cに一生の友になってくれと言おうかと手帳に記す。Cの肩上げについて手帳に記す。(「手帳8」補⑤P232～233)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。一時的なものである雑誌より単行本を出したいという手紙を送った直哉に対して、単行本より雑誌を出す方がいいと考える理由を述べる。(『武者小路実篤全集』)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ローザンヌの消印、麻布九月十五日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

8・11(日) 直哉は、榎本尚方を訪問。(日記)

「ノート3」を使い始め、『小説 冬』を書く。(「ノート3」補⑤P361～364)

夜十一時、直哉はCと結婚しよう、Cに打ち明けよう、祖母と母は不賛成は言うまい、と手帳に記す。(「手帳8」補⑤P233～234)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。『緑河岸』を中止して書き直す元気に感心した、今朝書き終えた小説を『二つの糧』と題した、など。(『武者小路実篤全集』)

8・12(月) 午前から、直哉は一人で元箱根に行く。Cから手紙が来る。返事を出す。(日記(「手帳8」補⑤P234～235) ↓『箱根山』)

「峠の雲」「すすき原」

木下利玄が直哉に病院から葉書を書く。昨日は落語研究会を聞いた、など。(『志賀直哉宛書簡集』)

8・13(火) 直哉は、六人で元箱根に行く。トルストイの“The Power of Darkness”(闇の力)を読了。(日記)

正親町公和が直哉に《武者も「二日の糧」といふ短篇が出来たさうだし君に緑河岸あつて今又「冬」が出来ようとしてゐるとは実に盛んだ、(中略)此の次の会は何月か知らぬが君が僕が当日の傑作を出す筈なんだつけねえ」という絵葉書を出す。(『志賀直哉宛書簡』)

武者小路実篤が直哉に葉書を書き、武者小路公共に大学をやめる許可を貰ったと報告。（『武者小路実篤全集』）  
木下利玄が直哉に病院から葉書を書く。（『志賀直哉宛書簡集』）

## 8・14（水）

終日雨。直哉は、加藤泰通を訪問。貸本屋のツルゲーネフの翻訳『片恋』を読む。（日記）↓『箱根山』『驟雨』  
Cに対する恋は熱烈ではない、今なら思い切れる、しかしツルゲーネフの小説の終わりに『私は其頃は未だ若かつたので、未来（中略）を際限もなく永いもの、やうに想つてゐた。何の、こんな事は未だ幾らもある事だ、まだく之よりも嬉しい面白い事もあらう…と思つた。…』（四迷の訳）とある、結婚を迷うのは臆病だ、帰京して打ち明けようと考ええる。（『手帳8』補⑤P.236～237）（『天津順吉』第二一八）

直哉は、箱根芦の湯から、林外科病院の木下利玄に絵葉書を出し、二十五日過ぎまでは確かにいるから遊びに来るようすすめる。（M40・8・14木下利玄宛書簡）

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。雑誌熱はよほど下がった、今は修養すべき時だと思う、など。（『武者小路実篤全集』）

木下利玄が直哉に病院から葉書を書く。米津政賢が来て『小赤壁』と『須磨寺』を置いていったとのこと。（『志賀直哉宛書簡集』）

## 8・15（木）

直哉は、ツルゲーネフの翻訳『奇遇』を読む。（日記）  
有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ローザンヌ十六日の消印、麻布九月十六日の消印。十三日に突然岩下家一がグリヨンから来た、など。（『志賀直哉宛書簡集』）

木下利玄が直哉に病院から絵葉書を書く。『万霊塔』は十月に出す、米津政賢の『リボン』も出すつもり、米津政賢の新作についてなど。（『志賀直哉宛書簡集』）

\*米津藤苑『なでしこ』が、十一月号の「こゝろの華」に掲載されている。



8・16(金) 「手帳9」(Impressions XIII)を使い始める。(新『志賀直哉全集』補⑤P 237)

8・17(土) 午後、直哉は湯の花沢に行く。(日記)

直哉は、自宅宛に絵葉書を送る。(M 40・8・17志賀直哉宛書簡)

8・18(日) 午前、直哉は二子山に登る。(日記)〔手帳9〕補⑤P 239

直哉は、Cとの知識の懸隔・性質の差を心配し、自分ばかりを愛していて、真に人を愛する事は今出来ないからイライラするのだと手帳に記す。〔手帳9〕補⑤P 241～243

8・19(月) 直哉は子供達と笛塚で遊ぶ。(日記)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。九月上旬まで金田にいるつもり、など。(『武者小路実篤全集』)〔志賀直哉宛書簡〕

木下利玄が直哉に葉書を書く。昨朝、退院したなど。(『志賀直哉宛書簡集』)

8・20(火) 志賀家一行、帰京。(日記)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。(『武者小路実篤全集』)〔志賀直哉宛書簡〕

木下利玄が直哉に葉書を書く。二十一日の消印。外出は思うようにできないので、話をしに来てくれ、とのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)

8・21(水) 夜、直哉は、木下利玄を訪問。緑側で世間話をし、米津政賢の小説評をしたり、『緑河岸』を読んだりする。雨が本

降りになり、直哉は木下家に泊る。直哉はCとの恋を木下利玄は国広いちとの恋を語り、どうすればよいのかを二時まで話し合う。翌朝八時過ぎ辞去。(日記)〔木下利玄日記〕〔手帳9〕補⑤P 258

8・22(木) 直哉は、小説には一貫したトーンが必要であると考え、『緑河岸』のトーンについて、再検討する。(『手帳9』補⑤P

243)

かごやの会話を手帳に記す(↓後の未定稿69『せめふさげ』(十))。(『手帳9』補⑤P 244)

夜九時、直哉は、Cと結婚を約束する。Cを愛しているが決して熱烈な愛というようなものではないという事も話し、Cの気持ち聞いた。自分の思っている事はすっかり言わずに、向うの思っている事をすっかり聞こうとするずい態度が醜くてかなわなくなってきた。もし結婚を申し込んだら承知するか、一週間でもいいから考えてから返事してくれと言った言葉が事実上のプロポーズとなった。亡母の指輪をはめて抱きすくめ接吻した。Cは気を失う。十二時過ぎCは戻る。(日記)〔手帳9〕補⑤P245〜251、258〔『天津順吉』第二一八〕〔過去二二〕〔未定稿四〕或る旅行記〕

8・23(金)

午前、直哉はCと会う。午後、木下利玄が志賀家に來宅。直哉は、昨夜Cと結婚の約束をした事、家族にはまだ話していない事などを語り、木下利玄の恋についても聞く。もう少し本人とも会っていいと思ったら、武者小路実篤・田村寛貞なども相談して堂々と強固に出るとアドバイスする。夜は米津政賢を訪問した為、直哉は、志賀留女へ言う時がなかった。(日記)〔木下利玄日記〕〔手帳9〕補⑤P258〔『天津順吉』第二一九)

8・24(土)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。昨日、米津政賢と直哉と半分ずつの短信を受け取った、など。(『志賀直哉宛書簡』)午前、直哉は、Cとの事を志賀留女に話し、志賀浩に話す。夜、Cと十二時まで話す。金田の武者小路実篤に戻ってくれと手紙を出す。(手帳9)補⑤P258(日記)〔『天津順吉』第二一九〕〔過去二二〕〔未定稿四〕或る旅行記〕

Cへの結婚申し込みの経緯を振り返ってまとめたものを手帳に書く。これからの二年間に出来るだけ活動しなくてはならぬ、「ドイツ語」「国文」「漢文」「心理学」の試験を受けて、翌年出すべき論文の準備をしなければならないと思う。《余は罪を犯せり、墮落せり》と手帳に記す。(手帳9)補⑤P246〜251)

木下利玄が直哉に葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

8・25(日)

志賀留女は、平民の娘を嫁にした事は志賀家にはない事だと、直哉とCとの結婚に反対する。直哉は、世人が世間を恐れていたと思う正しい事も出来ずにいるのを打破してやろうというのが自分の仕事の一つだ。キリストは大工の子である、左官の娘と結婚して何が悪いかと思う。父は洋行させた後相当な人を探すつもりだからいけない、ともか

くCを帰せと言う。Cと約束するに於てはCの愛がまだまだ足らぬので自分の愛もそれほど強くない、今晚よく相談して一先ず破約してもよいと思う。夜、Cと肉体関係生ずる。武者小路実篤に帰るに及ばずとの手紙を出す。《この後不真面目であるならば余は大罪人である、地獄に行くべき大罪人である》と手帳に記す。(日記〔手帳9〕補⑤P 251～253、258)〔大津順吉〕第二一九〔過去 二二〕〔未定稿129〕或る旅行記)

木下利玄が直哉に葉書を書く。土肥博士の診察は火曜の午前八時から十二時だ、『万霊塔』を修正している、など。(志賀直哉宛書簡)

8・26(月)

午前、直哉は志賀留女と激論し、どうしてCに暇をやるかと考えているという留女に対し、留女を捨てると言う。夜、Cと話し、肉交あり。留女と両立しない場合如何にすべきかをCに相談し、自分を捨ててもよいと言われる。

〔手帳9〕補⑤P 258 (日記)〔大津順吉〕第二一九

直哉は、祖母は世界に唯一人の自分を愛してくれた人だから、祖母や母を恨んではいけないというCへの願いを手帳に書く。(手帳9)補⑤P 253～254

8・27(火)

朝、武者小路実篤が金田から帰り、直哉は急いで行く。武者小路実篤は熱烈ではないから意味がある、直哉一人の問題ではないと言う。午後、木下利玄を訪問。夕方帰ってCに前夜の弱い言葉を取り消す。夜、志賀浩と話す。浩は同情してくれる。この日から志賀留女が寝込む。留女はCに直哉の部屋への出入りを禁ずる。(手帳9)補⑤P 258～259

(日記)〔大津順吉〕第二一九

8・28(水)

午前、武者小路実篤が志賀家に來宅。直哉はCを紹介する。午後、芝から銀座の方を散歩。夜、Cと話し肉交あり。Cに、前日非常に心細かったから、なるべく家において欲しいと頼まれる。(日記〔手帳9〕補⑤P 259)〔大津順吉〕第二一十

直哉は、《祖母は結婚をいなむより承知しなければ捨てるといつた事を怒つてゐる(中略)のか》、《自家の祖母は余を愛する、然し少しも解してはくれない、(中略)信用してくれない、これが総てを不幸にしてゐる》、Cに「貧乏し

てもいいか」と尋ねると「いやだけれどしかたがない。うまいものは食べなくてもいいが、いい着物が着たい」と答えた」と手帳に記す。(「手帳9」補⑤P254～255)〔天津順吉 第二十一〕

## 8・29(木)

武者小路実篤から『不幸な祖母さん』が来る。志賀直方が上京、直哉と午前話す。夜、直哉はCと一寸話す。志賀浩は直哉を偽り、Cは兄に会う為と騙されて今井に連れて行かれる。咲かせいのしたことだと思ふ。直哉はCを帰した事を後悔する。夜、直方から志賀直温の意向だった事を聞かされ、激怒。十二時過ぎ、直温に起きよと言うがいやだと言われる。四時まで眠れず、有島生馬に手紙を書く。一人物干し台に上る。(「手帳9」補⑤P255、259)〔日記〕(日本近代文学館「第249号」〔天津順吉 第二十一〕十三)〔過去 二〕(未定稿129『或る旅行記』)

武者小路実篤が直哉に、『冬』の書き始めをうまいと褒めた葉書を出す。(『武者小路実篤全集』)(『志賀直哉宛書簡』) 里見弾が直哉に葉書を書く。一ヶ月の鹿野山の生活も今晩限りとのこと。(『志賀直哉宛書簡』)

## 8・30(金)

朝、直哉は、武者小路実篤を電話で呼んで、有島生馬への手紙を見せ、一緒に泣く。志賀浩にC兄妹に今日来るよう今井へ電話して貰うが、今朝早く帰郷したと言う。武者小路実篤と志賀直方が会う。午後、寝ている志賀留女に『不幸な祖母さん』を読んで聞かせ、和解。直哉は浩に、Cの兄の上京とCに希望を与える手紙を書いてくれというが、浩が書いた手紙には不服。夜、Cがまだ本所に居る事を、武者小路実篤に知らされ、泣いて怒る。夜、黒木三次の所に行く。(日記)〔手帳9〕補⑤P259～260)〔未定稿129『或る旅行記』)

木下利女が直哉に手紙を書く。武者小路実篤の『二つの糧』を読んだ、『万霊塔』を完成させた、『十四日』諸兄の注文はできるだけだけ入れてある、佐佐木信綱が大修正がいると言ったら「心の花」はやめて、来年武者小路実篤の出す雑誌に載せようと思ふ、など。(『志賀直哉宛書簡集』)

## この日か?

直哉は、有島生馬に手紙を送る。(M40・8・；有島生馬宛書簡)

## 8・31(土)

直哉は、武者小路実篤と松戸の勘解由小路資承を訪問。翌日、勘解由小路資承と志賀直方が会うことにして小見川行

9・1(日)

きは見合わせ、帰ると、志賀留女が大病。留女が死ぬかと思ひ、泣く。(日記)〔手帳9〕補⑤P.255、261〔未定稿129〕『或る旅行記』

直哉は、病気の留女を見捨てられず、志賀家を出られなくなる。(手帳10)補⑤P.264

四月四日の通信省告示第二百三十三号で告げられた、鉄道国有法第三条による、総武鉄道株式会社所属鉄道の買収期日。(『鉄道国有始末一斑』)

志賀直温、総武鉄道株式会社国有のため解散に付き、専務清算人となる。(志賀家系図)

午後、勘解由小路資承、武者小路実篤、黒木三次が志賀家に来宅。勘解由小路資承と志賀直温が会うことになる。志賀留女、神経痛で苦しむ。(日記)〔手帳9〕補⑤P.255、261  
有島武郎、麻布の歩兵第三聯隊に入営。十一月三十日まで勤務。(『有島武郎全集』年譜)

\*『丸善の憶ひ出』・『武郎さんのこと』・対談『志賀直哉氏の文学縦横談』などによると、有島武郎は風呂に入りがてら志賀家によく遊びに来たという。また有島武郎『気分で生きて行く人』によれば、有島武郎は、直哉の家に来ていた「サーザン」という外国の芝居の雑誌をよく兵営に持ち帰って楽しんだという。

武者小路実篤が直哉に『緑河岸』の感想を書いた書簡を送り、要点でもない所を一々書く欠点を指摘する。(『武者小路実篤全集』)〔志賀直哉宛書簡〕

9・2(月)  
武者小路実篤と勘解由小路資承が志賀家に来宅。志賀直温と勘解由小路資承が面談するがうまく行かない。銚子にいるCから手紙が届き、直哉はCへ手紙を書く。(日記)〔手帳9〕補⑤P.256、261～262

\*『過去』(二)によれば、Cから時々貰う手紙は甚だ興ざめなものだった、実にありきたりな形式を追いひどく卑俗な感じを受けた、とにかくもつと教育しなければならぬと思った。

木下利玄が直哉に葉書を書く。(志賀直哉宛書簡)

9・3(火) 武者小路実篤が徳富蘆花に会いに夜道を歩いて行ってくれたが、徳富蘆花は不在。田村寛貞が志賀家に来宅。直哉は有島武郎にCとの事を打ち明ける。(日記)〔手帳9〕補⑤P261

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ローザンヌの消印、麻布十月四日の消印。〔志賀直哉宛書簡集〕

この頃 直哉は、Cの教育計画を立てる。(手帳9)補⑤P256

9・7(土) Cの兄・忠太郎が上京、直哉は武者小路実篤の家で会う。(日記)〔手帳9〕補⑤P262

9・9(月) 夜、武者小路実篤、有島武郎、田村寛貞が志賀直温と面談。Cを捨てるか家を捨てるかと迫られ、直哉は家を出る事にする。(日記)〔手帳9〕補⑤P261〔過去〕一一

\*『暗夜行路』草稿13(十六)や『祖母の為に』の記述を参考にすると、直哉の名で留女がためたお金が五百円ほど銀行に預けてあり、それで二年ほど暮らすつもりだった。

木下利女が直哉に葉書を書く。武者小路実篤からなりゆきは大体聞いている、『万霊塔』について、明日の午後か夜に行く、など。〔志賀直哉宛書簡〕

9・10(火) 麹町の里見弾が麻布の直哉に絵葉書を書く。志賀留女の病気はいかが、休みも今日一日となりうんざり、拙作の悪口を聞かせて欲しいとのこと。(『志賀直哉宛書簡』) \*八月十日付とされているが発信地などから九月十日の間違いと推定。

この頃か? 鹿野山で里見弾が書いた小説に直哉が丁寧な評を書く。白痴の身の上話(↓乙馬鹿)は褒めるが、若い後家の情欲を書いたもの(↓お庄)は、性欲とそれに打ち克つだけのものとの間の争闘が書かれていないとして不評。好奇心からああいうものを書くのは邪道と批判する。里見弾は自分の事を書いたもの(↓お峯)は見せる勇気がなかった。

〔里見弾『君と私』十四)〔里見弾『雑記帖』

9・11(水) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。イヴェルドン十三日の消印、麻布十月十四日の消印。〔志賀直哉宛書簡集〕

- 9・12(木) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。イヴェルドン十四日の消印。麻布十月十四日の消印。〔志賀直哉宛書簡集〕
- 9・13(金) 柳宗悦が直哉に絵葉書を書く。“Brand”と子規短篇集のお礼。田村寛貞に事情を聞いた、など。〔志賀直哉宛書簡〕  
〔柳宗悦全集〕
- 9・14(土) 岩倉道俱が志賀家に来宅。岩倉道俱は直哉とCとの結婚に反対する。岩倉道俱は夫婦になってから妻を教育することは不可能だ、二人きりだと我が儘になる、という。武者小路実篤が徳富蘆花に話してくれる。〔日記〕〔手帳9〕補⑤P 256、257、262
- 9・15(日) 直哉はCとの事件の経緯を手帳に書き留める。〔手帳9〕補⑤P 257～262
- 9・16(月) 武者小路実篤が志賀家に来宅。〔手帳9〕補⑤P 262
- 9・17(火) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。チューリッヒの消印、麻布十月十四日の消印。〔志賀直哉宛書簡集〕
- 直哉は、木下利玄に絵葉書を書く。翌日投函。朝から丸善へ行き、梅園で昼食、中西へ行き、正親町公和を訪問。帰りに武者小路実篤を訪問。川村弘に電話し大学が今日からだったと聞いた。米津政賢の作品をなるべく早く送って欲しい、一昨晩来ての話にわるくないものらしいので楽しみだ、など。〔M40・9・17木下利玄宛書簡〕
- 9・18(水) 木下利玄が直哉に絵葉書を書く。十九日の消印。〔志賀直哉宛書簡集〕
- 9・19(木) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。バーゼルの消印。〔志賀直哉宛書簡集〕
- 9・20(金) 夜、直哉は白鳥庫吉を訪問するが不在。正親町公和を訪問。〔日記〕
- 9・21(土) 直哉は、武者小路実篤と小見川に行く。四時頃着。夜、Cと話す。Cの父母姉兄弟に会う。夜うなされ、地震にあう。〔日記〕〔手帳14〕補⑥P 48〔未定稿129〕『或る旅行記〕
- 9・22(日) 直哉らは十二時出発、夜帰宅。黒木三次と有島武郎が待っていた。黒木三次が内村鑑三と服部他之助に話したというので怒る。〔日記〕

9・23(月) 午後、直哉は内村鑑三を訪問。内村鑑三に結婚前のCとの肉交を罪と言われるが納得しない。困ったような笑顔を見せる内村鑑三に、直哉は嘗てなかった親しみを感じる。帰り、武者小路実篤の所に寄る。正親町公和も来る。(日記)

〔内村鑑三先生の憶ひ出〕(未定稿129)『或る旅行記』(『暗夜行路』草稿13十六)

9・24(火) 直哉は、武者小路実篤・正親町公和・木下利玄と八王子に家探しに行く。(日記)〔過去二〕(未定稿129)『或る旅行記』

この頃か? 直哉は養鶏で自活しようとし、養鶏と園芸果樹に関する参考書を手帳にメモする。〔手帳9〕補⑤P262、263

9・25(水) 直哉は八王子から小宮村に行き、よい土地と家を見付ける。帰途、大久保の種禽場へ寄る。田村寛貞の所に寄り帰宅。

(日記)〔過去二〕(未定稿129)『或る旅行記』

有島武郎から直哉へ書簡。明日午後六時頃参上とのこと。(M40・9・25志賀直哉宛有島武郎書簡)

9・26(木) 夜、直哉は有島武郎と面談。有島武郎は直哉と同意見。(日記)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリ二十七日の消印、麻布十月十七日の消印。直哉に起こった事件とは何か、など。

〔志賀直哉宛書簡集〕

9・27(金) 直哉は武者小路実篤と徳富蘆花を訪問。徳富蘆花は三十分沈黙していた。ある事を直哉に勧め、自分もそうしたいが

家の都合で出来ないと言った。Cとの肉交を罪とは思わないが、今すぐ結婚するのは危険と忠告した。(日記)〔武者小路実篤『或る男』百十一)

〔読売新聞〕に、総武鉄道慰労金の分配率は、《分配総額三十五万円にて内十三万円を重役及び特別功労者へ残額二十

二万円の二割五分を各使用人引渡当時の現給料に充て其六割は現在職員及び勤続年限に割当て一割五分は雇員以下の

功労者に割当》てることとなったと出る。

直哉は、武者小路実篤と鎌倉雪の下へ。(日記)〔未定稿129)『或る旅行記』

9・28(土)

9・29(日) 朝、直哉は建長寺へ行き管長と話す。午後養鶏園を見る。(日記)



9・30(月) 直哉は建長寺へ行くが、下らないと思う。(日記)

10・1(火) 直哉は建長寺へ行く。(日記)

鎌倉から直哉は武者小路実篤と連名で、木下利玄に手紙を送る。(M40・10・1木下利玄宛書簡)

政府は私鉄の国有化を完了。(M40・10・1「読売新聞」)

10・2(水) 直哉は建長寺へ行き、帰京。夜、有島武郎と面談。木下利玄が志賀家に来宅。(日記)

10・3(木) 武者小路実篤と正親町公和が志賀家に来宅。夜、直哉は志賀留女のことと泣く。(日記)

木下利玄が直哉に葉書を書く。写真について。(志賀直哉宛書簡)

10・4(金) 午後、直哉は里見弴を訪問。夜、米津政賢が来る。(日記)

10・5(土) 夜、有島武郎が志賀家に来宅。直哉は有島生馬からの手紙を読み、困る。(日記)

\*『蝕まれた友情』(一)によれば、生馬に養鶏で生活することを手紙に書くと、「なぜ文学で活計を立てようとしなのか」という叱責の返事が来た。父からも「文学で食うことも出来ない癖に」と言われていた。その頃は創作を一生の仕事にする決心は出来ていたが、書いたものにならない点では以前と同じだったので、直哉は自分の不甲斐なさを恥じ、悲しんだという。

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。(『武者小路実篤 全集未収録書簡集』)

10・7(月) 直哉は朝、武者小路実篤を訪問。(日記)

10・8(火) 木下利玄が志賀家に来宅、直哉と十一時近くまで話す。(日記)

10・9(水) 直哉は神田に古本を売りに行き、シェークスピアの全集を買う。帰り、正親町公和の所、武者小路実篤の所に寄る。

Cより大至急の手紙あり、帰って返事を出す。(日記)

木下利玄が直哉に手紙を書く。病気だ、自分の恋について、明日は志賀家に行けない、とのこと。(志賀直哉宛書簡)

- 10・10(木) 木下利玄が来るというので、直哉は一日待つが来ない。(日記)
- 10・11(金) 直哉は武者小路実篤を訪問。里見淳の所に寄る。夜、木下利玄を訪問すると病気だった。(日記)
- 昼、木下利玄が直哉に葉書を書く。断りの郵便が遅れたことの詫び。明日より旅だろう、とのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 10・12(土) 直哉は武者小路実篤を誘い、白馬会に行く。(日記)
- 10・13(日) 木下利玄が直哉に葉書を書く。昨日より体調がよい、奈良に寄るなら一寸した土産を頼むなど。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 10・14(月) 直哉は武者小路実篤と八王子に行く。(日記)
- 10・14(月) 午前、直哉は志賀留女と話す。留女の言うことは全然要領を得ず、泣く。午後、武者小路実篤が来る。夜十時出発の予定だったが、できなかった。Cと手紙の往復あり。(日記)
- この頃か？ 直哉は、『シエレー』(十二文豪)を読む。(『手帳10』補⑤P266)
- 10・15(火) 直哉は午前武者小路実篤の所に行き、午後から小見川に行く。汽車の中で木下尚江『火の柱』を読む。八時半頃着。
- Cの兄・父と話し、Cと話す。十二時過ぎ寝る。肉交。(日記) (『過去』三) (『手帳10』補⑤P267)
- 小見川では、直哉とCとの事が評判。(阿川弘之『志賀直哉』)
- 10・16(水) 午前、直哉はCの叔父と話し、Cと話す。午後、C・文二・常次郎と山に行く。夜、忠太郎と話す。木下尚江『火の柱』を読了。(日記) (『過去』三)
- 10・17(木) 朝、直哉はCと話す。川汽船で、C・母・兄と共に佐原に行き、十二時の汽車に乗り、四時半過ぎ上野着。武者小路実篤の所に行き、十時頃宿屋に泊まる。(日記) (『過去』四)
- 10・18(金) 直哉は十時の汽車で武者小路実篤と鶴沼に赴く。東屋に泊まる。(日記)
- 鶴沼で同人雑誌の相談をする。武者小路実篤の持つて来た絵の本の中から挿絵を選んだ。(『過去』四) (武者小路実篤

『或る男』百九

10・19(土) 直哉は『エマルソン』(十二文豪)を読む。(日記)〔手帳10〕補⑤P267

10・20(日) 直哉は午後、片瀬から江ノ島へ散歩。エマルソンの書簡集を読む。(日記)〔手帳10〕補⑤P267

10・21(月) 直哉は、サン・ピエールの略伝を読む。(日記)

木下利玄は、見舞いに来た正親町公和より、来年一月から『十四日』会で雑誌を編纂する事になり、名前は聖書からとった「やはらぎ」になったと聞く。(木下利玄日記)

\*「ノート5」(補⑥P212)の「白権発刊の辞」にも、雑誌名は最初「やはらぎ」を考えていた、直哉は「やはらぎ」という名前を考える場には不在だった、とある。

10・22(火) 直哉は『ジョンソン』(十二文豪)を読む。(日記)

10・23(水) 「手帳10」(Impressions XIV)を使い始める。(新『志賀直哉全集』補⑤P263)

直哉は志賀直温に、結婚をめぐる事件について、一二年或いは三四年考えさせてくれという手紙を書く。(「手帳10」補⑤P263)

お蔭夫婦を描いた『工夫の富次』(『工夫の妻』という題にしたい)を一年計画で書き単行本で出そうと考える。(「手帳10」補⑤P266)

トルストイの『男女観及び人生の意義』を読む。《○男女の分業 男は人類幸福の増加の為め働き、女子は人類の持続の為に働く》《○人生の目的は、神の意志を遂行する事か、人類の為め幸福の益すやうにする事か、或は自己の完全なる発展であらうか(中略 いづれも終に一致せねばならぬ)》などの内容。今戸からの手紙で武者小路実篤は帰京。有島生馬へ手紙。(日記)〔手帳10〕補⑤P267

木下利玄が直哉と武者小路実篤宛に葉書を書く。風邪から黄疸になり、更に薬に負けて寝た、奈良には行かないのか、

月謝は誰かに頼んだのか、など。(『志賀直哉宛書簡集』)

10・24(木) 直哉は志賀直温に、二三年或いは三四年考える時を乞う手紙を出す。(日記)

人見一太郎の『ユーゴー』(十二文豪)を読む。(日記)〔手帳10〕補⑤P21〕22)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。口絵のことはまた少し変更しなければならぬ、直哉が帰ってから相談しよう、フォイエルバッハはベックリンなどは無関係なので抜かす方がいい、など。(武者小路実篤全集)

木下利玄が直哉に葉書を書く。『雑誌の事は沙鷗からきいた。』とのこと。(『志賀直哉宛書簡』)

10・25(金) 直哉は『お順真三』について考える。(手帳10)補⑤P21)

人見一太郎の『ユーゴー』を読了。(日記)〔手帳10〕補⑤P21〕22)〔ノート5〕補⑥P212)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。今戸は不合格だった、など。(武者小路実篤全集)〔志賀直哉宛書簡』)

10・26(土) 直哉は十時半の汽車で藤沢発、帰京。木下利玄が志賀家に来宅。丸善でダーウィンとヘッケルを買う。武者小路実篤の所へ行く。(日記)

10・27(日) 夕方正親町公和が来るはずだったが来ないので、直哉は武者小路実篤の所へ行く。(日記)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリ二十八日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

10・28(月) 午前、直哉は、武者小路実篤・正親町公和・今戸らと文展を見る。武者小路実篤と丸善に行き、ウーデを注文。夜、

『バイロン』(十二文豪)を読む。(日記)〔手帳10〕補⑤P23)

10・29(火) 午前、直哉は田中平一への手紙を書き、『緑雨遺稿』を買ってきて読むが下らない。午後、田村寛貞が志賀家に来宅。

(日記)〔手帳10〕補⑤P23〕24)

10・30(水) 午前、武者小路実篤が志賀家に来宅。午後、直哉は『ゲートル』(十二文豪)を読む。夜、有島武郎が来訪し、有島武が関安子の事を知ったと言う。(日記)

10・31(木) 直哉は、住谷天来訳のウアーダの『十九世紀の予言者』を読了。夜、武者小路実篤を訪問し、正親町公和の家に行くが不在。(日記)

この年の秋か？

里見弾が年上の女中・八重と関係を持つ。(里見弾『君と私』十五)

この頃か？

直哉は、Cを佐原市内の井上裁縫女学校に入学させ、寄宿舎に入れる。(阿川弘之『志賀直哉』)

直哉の小遣い銭の一部で学費を出した。(過去)五

三十円貰う小遣いのうちから、毎月十円づつ送り、佐原の小さな私立の女学校に入れた。しばらくしてCから来た写

真の田舎くささに我慢できず、破り捨てた。Cの書く手紙はいつも幻滅の種になった。(未定稿④『或る旅行記』)

11・3(日)

木下利玄が直哉に葉書を書く。ノートを写すので暇がなくご無沙汰した、十日はどうなったか、十一月末までには小説を一つ書きたい、など。(志賀直哉宛書簡)

11・4(月)

直哉は武者小路実篤と正親町公和の所に行く。(日記)

11・5(火)

直哉は雑誌をこわし、夜、武者小路実篤の所に行く。(日記)

11・7(木)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリの消印、麻布二十八日の消印。この間ロダンのクロッキを集めた展覧会があった、など。(志賀直哉宛書簡)

11・8(金)

直哉は銀座でウーデの額を頼み、築地の製本屋にハウプトマンを頼み、丸善でズーダーマンを買う。夜、里見弾が志賀家に来宅。(日記)

武者小路実篤が木下利玄と寄せ書きで、直哉に葉書を書く。十二日九時に丸木に集合しよう、武者小路実篤は『其面影』を読んで感心した、直哉が借りて先に読んで木下利玄に貸して欲しい、など。(武者小路実篤全集)(志賀直哉宛書簡)

11・9(土) 午後、直哉は武者小路実篤を訪問、正親町公和の所に行く。正親町公和は正親町実正に廃学と結婚の申し出をしたと  
のこと。三秀舎へ行き、千部七十円位と聞く。雑誌の値段の相談か? (日記)

11・10(日) 直哉は『其面影』を読了、感服する。(日記)

11・11(月) 直哉は武者小路実篤と荒川へ行き、ベックリンの複写を頼む。(日記)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリ十二日の消印、麻布十二月三日の消印。(志賀直哉宛書簡集)

11・12(火) 午前、《十四日》の直哉・武者小路実篤・木下利玄・正親町公和は丸木で写真撮影。午後四人で志賀家で話す。「やは  
らぎ」の名は、直哉と木下利玄が気に入らなかった為、議論の末、「白樺」とする。(日記) (木下利玄日記) (新潮日本文  
学アルバム 志賀直哉等掲載・写真)

\* 武者小路実篤『或る男』(百九)によれば、どうしてもいい名がなく、色の名を組み合わせて「白樺」という名が  
できあがった、白樺は皆の好きな樹で、赤城山を連想し、それも気持ちよかったという。

この頃か?

直哉は、「白樺発刊の辞」、「口絵に就て」を書く。口絵は、この一年間はドイツの理想派(ベックリン、トーマ、クリン  
ゲル、スツック、ホフマン)を載せる事にしたという。(ノート5) 補⑥P 212→213

\* 『美術雑談』「白樺」時代」によれば《武者は独乙語をやる関係で、丸善からよく「モノグラフィイエン」を買つ  
てきて、ベックリン、クリンゲル、ステュックその他を吾々に紹介した。美術に対し感覚的にわかるといふより、む  
しろ文学的にわかりのよいものの方が喜ばれた形だ。「白樺」を始め出した頃までそれが続いた。「白樺」の一、二号  
まではそれだった。》という。

11・13(水) 午後、直哉は内村鑑三の所に行く。非常に快い。木下利玄の家に一寸寄り、銀座を回り、帰宅。(日記)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。(『武者小路実篤全集』)

11・14(木) 午前、直哉は『明治文学史』を読む。志賀留女と衝突。夜、武者小路実篤を訪問。(日記)

- 11・15(金) 午前、直哉は「聖書之研究」を読む。夜、柳宗悦の家に行く。(日記)
- 木下利玄が直哉に葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡』)
- 11・17(日) 午前、直哉は柏木の内村鑑三の会に行く。(日記)
- 11・20(水) 夜、直哉は林三郎を訪問。(日記)
- 11・21(木) 総武鉄道の慰労金分配を巡って不平を持つ者が結成した正義同志会の二百人余りが、三の輪の青田綱三家に押しかける。交渉委員の中に、佐倉駅助役・丸山俊の名前あり。(M40・11・23『読売新聞』)
- 11・22(金) 正義同志会の交渉委員が青田綱三と会見し、帳簿の閲覧を請求するが、拒否される。慰労金は十三万円を重役九名、二十二万円を千余名の職員一同で分配されたが、分配率は、青田綱三・志賀直温・富田正雄が決め、分配の仕方が不公平だとの風評があった。(M40・11・23『読売新聞』)
- 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。十月二十三日の鶴沼よりの手紙を拝見、徴兵についての直哉の考えは周到だ、雑誌はやりかけて勇気が続けば大いに偉いと思う、など。(『志賀直哉宛書簡』)
- 11・23(土) 直哉は、武者小路実篤・正親町公和と木下利玄を訪問。夕方、帰宅。里見弴の所に一寸寄る。(日記)
- 11・24(日) 午前、直哉は内村鑑三の所に行く。志賀留女の床上げ。(日記)
- 11・25(月) 直哉は小杉天外の『新夫人』を読了。(日記)
- 正親町公和・木下利玄・加藤泰吉が連名で、直哉に絵葉書を書く。二十七日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 11・27(水) 木下利玄が直哉に絵葉書を書く。『仲なほり』は三十日昼までに書き上げて、午後、武者小路実篤の家で会いたい、など。(『志賀直哉宛書簡』)
- 12・2(月) 木下利玄が直哉に葉書を書く。三日の消印。五日午後二時頃から志賀家に行くとのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 12・5(木) 里見弴が、ノート「屋根の草」に「兄妹きょうだい」を執筆。(里見弴『雑記帖』所収「屋根の草」)

直哉は、里見淳の『兄妹』を器用と評し、里見淳と小山内薫を比較した。(里見淳『君と私』十九)

12・9(月) 直哉は、木下利玄に絵葉書を送る。昨日はすす掃きで直哉も活躍した、など。(M40・12・9木下利玄宛書簡)

12・10(火) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリの消印、麻布十二月三十一日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

12・14(土) 木下利玄が直哉に葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

12・15(日) 旧総武鉄道の社員ら三十余名が、分配金について面談しようと、三河台の志賀家へ押しかけようとする。麻布署が食

い止め、談判することがあれば委員を選んずるようにと説得する。(M40・12・16「読売新聞」)

12・19(木) 木下利玄が直哉に葉書を書く。二十日の消印。『仲なほり』について、二十一日の『十四日』で会おう、など。(『志

賀直哉宛書簡集』)

12・21(土) 『十四日』の会合。(M40・12・19直哉宛木下利玄書簡)

12・23(月) 旧総武鉄道の社員からなる正義同志会の六十名が三の輪の青田綱三家に押しかける。下谷署が委員を選び穏和に談判

するようにと説諭し、委員となった丸山俊ら四名が青田に面会を求めたが不在との理由で断られる。彼等が三河台の

志賀直温家に押し寄せるとの風説もあり、麻布署も警戒。(M40・12・25「読売新聞」)

この頃か? 志賀直温に非常な悪意を感じていたにも関わらず、賞与金分配をめぐるトラブルから鉄道会社の使用人が談判に来る

と、直哉は心から直温の身を案じて、父を守ろうとし、自己の内の直温への愛を自覚する。(『暗夜行路』草稿2三)

(『暗夜行路』草稿13廿二)

総武鉄道の志賀直温の退職金は三万円だった。(座談会『志賀直哉日記をめぐって』(『祖父』十六)

この年の十二月か? (内村鑑三が柏木に転居してから。『内村鑑三全集』年譜によれば、転居は明治四十年十一月一日)

内村鑑三の所でのクリスマスマス会に向かう電車の中で、直哉は、陽光の中において埃が見える人々は大変それを気にし、陰になっていて埃が見えない人は平気な顔をしているのを目撃する。キリスト教でいう罪に対する意識も同じだと思



う。自分のように解脱しきれず、苦しんでいるのは、陽光中の埃に悩まされているようなものだ、それ位なら、埃を吸いながら平気である方がましだと思ひ、感話で話す。内村には「そんな話よりバラのさし木を作る話でもすればよかつた。」と言われ、気を滅入らす。(『内村鑑三先生の憶ひ出』↓『濁つた頭』(二)のモデル)

12・26(木) 湯ヶ島温泉の木下利玄が直哉に葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

12・28(土) 直哉は、『ひどい奴』執筆。自分の不正を見抜いた大学生をスリだと言う車掌を描いたもの。(未定稿34)

\*座談会『志賀直哉日記をめぐるつて』の「元良さんの心理学 『車掌』と云ふ小説」で語られている内容は、この『ひどい奴』のもの。

12・30(月) 伊豆山の川村弘が東京の直哉に手紙を出す。先日の礼状。(『芳舟遺稿』所収川村弘書簡)

?・16 正親町公和が直哉に絵葉書を書く。『野ばら』という小説を書きつつある、など。(『志賀直哉宛書簡』)

?・? 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリに来てみて驚いた作者は、クルベールとロダンとマネだ、など。(『志賀直哉宛書簡集』)